

「教育臨床総合研究 8 2009研究」

臨床・カウンセリング体験領域におけるC系・G系の授業実践(3) — バウムテストからみた学生の変化 —

Teaching Practices of Counseling and Group Approach Program
in “Experience Area of Clinical & Counseling Psychology” (3)
— The student's change from the viewpoint of Baum test —

三 嶋 朋 子*

足 立 智 昭**

Tomoko MIKAMO

Chiaki ADACHI

岩 崎 貴 雄*

Takao IWASAKI

要 旨

本研究は、島根大学教育学部の教員養成カリキュラムである「1000時間体験学修」のうち、カウンセリングマインドの育成を目的に行われている「C系・G系体験」において得られた学生の変化についての研究である。「臨床・カウンセリング体験領域」の一部であるC系・G系体験前後に、心理検査のひとつであるバウムテストを用いて、学生が描いたバウムにおいて、全体的印象評定の変化による着眼点を考察した。

[キーワード] バウムテスト 全体的印象評定 縦断的变化

I. はじめに

筆者は、島根大学教育学部において体験を重視した教員養成システムの一環として行われている「1000時間体験学修」の3つの領域(基礎、学校教育、臨床・カウンセリング)のうち、「臨床・カウンセリング」体験の主にC系(生徒指導・進路指導・保護者支援の臨床技術)・G系(子ども理解・学級集団形成の技術)体験を担当している。

「1000時間体験学修」の必修化がスタートして5年が経つ中で、教師にとって必要な力と学生のニーズを重ね合わせていく作業を基に一つのカリキュラムが形となって整ってきた。平成17年度には、「臨床・カウンセリング体験領域」のテキストが完成し、平成19年度には、更なる改定がなされた。そのテキストにも明記されているところの「臨床・カウンセリング体験領域」が目指すものは、“臨床マインドの育ち”である。臨床マインドとは、①相手の気持ちを理解する、②相手の気持ちに添った関わりがもてるという2点であり、この育ちを大きな目標として掲げている。現在、学校現場では、授業に向かう手前のところで、生きにくさを持っている子どもたちがたくさんいる。人と関わるのが自然に出来ない、学習に向かう気持ちにな

*島根大学教育学部心理・発達臨床講座

**島根大学教育学部附属教育支援センター

れない、学校に来ることが難しい等、何らかの配慮を必要とする子どもたちに対して、いつもとは異なる態度をとることが出来る教師が求められている。いつも教師は子どもを理解するよう心がけていることは当然だが、ここで言う“いつもとは異なる態度”とは、普段より一歩踏み込んでぐっと深く子どもに寄り添うことを意味するとも言えるだろう。そのためには、長い時間の子どもとのやり取りの経験、失敗も含めた教師としての経験から身に着いていく部分が多いのも現実だ。しかし、そのためにヒントとなる心理臨床的な「知識・技能・態度」について学生時代に学ぶことが、教師として育っていく中で手助けとなる部分は大きいと言える。筆者は、その「知識・技能・態度」について、同じ学生同士の体験の中から、わずかながらでも感じ取る力をクローズアップし、心理臨床的な視点を持つことの意味を学生自身のことばで探していってもらいたいと感じながら体験学修を行っている。

平成19年度後期には、今までの積み重ね資料を基にしたC系・G系体験を振り返るセルフチェックリスト等の体系化の試みもなされた。また、このC系・G系の体験がどのような形で学生に変化をおよぼしているのかという総合的な把握をするために、言語表現による意識的な変化とは別に、本人に意識されていない全体的印象の変化を把握するためにバウムテストを行った。このように、意識的・言語的振り返りから見えてくる学生像と、無意識的・非言語的素材から見えてくる学生像を合わせ、より多角的な検討が可能となった。本研究では、C系・G系として、学生自身が構成メンバーとなり、様々な臨床技術を体験的に学んでいくカリキュラムの始まる前とカリキュラム終了後に行われたバウムテストから見えてくる学生像を中心に考察していきたい。

バウムテストは、心理検査の分類では、投影法にあたる。投影法とは、曖昧な刺激に対する反応から、その人の全体像を把握しようとするものである。その中でも描画法は、絵を描いてもらうことを通して、その人のパーソナリティ把握を試みるものであり、元来は描かれた絵から、個々のパーソナリティの無意識的な部分を含め、検討の可能性を探っていく。今回使用したバウムテストは、自分を隠そうとする防衛がはたらきにくいといわれており¹⁾ (Koch, 1970)、比較的抵抗感なく課題に取り組むことが可能な心理検査である。さらに、バウムテストによる全体的人格像の把握が可能であるとされており²⁾ (高橋、1993)、健常者である学生の把握にも十分な情報量をもっている。また、バウムテストは自由度が高く客観性が低いとされる心理検査であるが、その点を補い、全体的印象評定を行うための統計的な処理による尺度が検討、研究されてきている^{2), 3), 4)} (高橋、1993・鈴木ほか、1999・鈴木ほか、2002)。

このような先行研究を参考に、バウムテストの分析を通して、①C系・G系体験前後の学生変化の検討、②C系・G系体験の持つ役割の二つを目的に調査を行った。

II. 方法

1. 対象者と時期

対象時期：学部2回生後期から学部3回生前期にわたる1年間。

(平成19年度後期～平成20年度前期)

対象者：教育学部生 177名。

2. 調査の手続き

(1) C系・G系体験の概要

C系では、主に個人に対する相談を行う上で必要となる知識・技能の習得を、G系では、まとまりのある学級集団作りなど、集団に対する支援を行う上で必要な知識・技能の習得を目指す体験実習である。カリキュラムの詳細については、「臨床・カウンセリング体験領域におけるC系・G系の授業実践(1)」を参照。

(2) 調査の実施

バウムテストを、2回生後期開始時(体験前)と3回生前期終了時(体験後)にそれぞれ1回ずつ、計2回、集団で実施した。

材料：A4版のケント紙、2Bの鉛筆。

教示：「今から、あなたに絵を描いてもらいます。

これは、絵の上手下手を調べるわけではありませんから、気軽に描いて下さい。

写生ではなく、自分の思ったように描いて下さい。

消しゴムを使ってもかまいませんので、丁寧に描いて下さい。

それでは、木を1本描いて下さい」

(3) 感想の記述

バウムテスト施行後、①どうして、この木を思いついたのですか?②この木に必要なものは何ですか?③この絵はあなたが描こうと思ったように描けましたか。描き足りない部分や描きにくかったところはどこですか?④感想などを自由に書いてください、という4点について記述を求めた。

(4) バウムテストの全体的印象評定の実施

バウムテストの全体的印象評定尺度³⁾(鈴木・鍋田1999)を用いて、155名のバウムテスト計310枚をそれぞれ、臨床心理学専攻の大学院生が28対の形容詞対について7段階評定した。評定の際には、より客観的なデータを得られるように、同一対象者の体験前・体験後のペアにせず、ばらばらに評定するように配慮した。

(5) バウムテストの全体的印象評定の変化における分類

統計的処理をもとに、全体的評定の変化における着眼点について、分類を行った。

III. 結果

1. バウムテストの印象評定尺度の因子分析

7人の評定値の平均値を各バウムテストの印象得点とし、C系・G系体験前後のバウムテストが揃った155名の学生、計310枚のバウムテスト印象得点を用いて、主因子法により、28対の形容詞対の因子分析を行った。バリマックス回転後、因子負荷量0.6未満の3項目を削除し、再度因子分析を行った結果、表1のような結果が得られた。このような結果については、おおよそ鈴木・鍋田(1999)で得られた結果³⁾と一致している。ゆえに、鈴木らが命名した因子名を一般化可能なものと捉え、本研究でも同様に呼ぶこととする。

第1因子では、「しっかりとしたー頼りない」「堂々としたー貧弱な」「力強いー弱々しい」等、力強さ、勢い、明るさ等バウムテスト全体から受ける活力、エネルギーといった印象を中

心とした項目なので、「エネルギー感」の因子とする。

第2因子では、「幼稚でない-幼稚な」「写実的な-イラスト的な」「立体的な-平面的な」等、バウムテスト全体から受ける緻密さ、詳細さ、表現力の豊かさといった印象を中心とした項目なので、「成熟度」の因子とする。

第3因子では、「整った-いびつな」「まとまりのある-まとまりのない」「穏やかな-激しい」といった木の形態における統制の程度、落ち着きといった印象を中心とした項目なので、「コントロール感」の因子とする。

表1. 形容詞対の因子分析結果 (バリマックス回転後)

変数名	因子1	因子2	因子3
エネルギー感(13項目) $\alpha=.957$			
13. 頼りない-しっかりした	-0.915	-0.171	-0.090
10. 堂々とした-貧弱な	0.910	0.016	-0.051
12. 弱々しい-力強い	-0.903	-0.062	0.153
5. 勢いのある-勢いのない	0.892	0.081	-0.216
4. のびのびした-萎縮した	0.859	-0.152	0.082
25. 生き生きとした-生き生きしていない	0.851	0.076	0.300
2. 貧困な-豊かな	-0.815	-0.170	-0.363
23. にぎやかな-さびしい	0.772	-0.160	0.196
1. 大きい-小さい	0.734	0.003	-0.255
14. 空虚な-充実した	-0.697	-0.321	-0.343
15. 安定した-不安定な	0.695	0.171	0.381
7. 開放的な-閉鎖的な	0.640	-0.350	0.258
9. 暗い-明るい	-0.609	0.461	-0.442
成熟度(7項目) $\alpha=.930$			
24. 幼稚な-幼稚でない	0.107	-0.941	0.060
22. 写実的な-イラスト的な	-0.087	0.931	-0.137
17. 立体的な-平面的な	0.166	0.863	-0.023
6. 単純な-複雑な	-0.088	-0.845	0.274
11. 現実的な-非現実的な	-0.006	0.770	0.273
27. 未熟な-成熟した	-0.347	-0.758	-0.271
3. 細かい-荒い	-0.103	0.608	0.480
コントロール感(5項目) $\alpha=.882$			
21. いびつな-整った	-0.123	-0.054	-0.935
16. まとまりのある-まとまりのない	0.119	0.077	0.774
26. 激しい-穏やかな	0.338	0.086	-0.737
20. なめらかな-なめらかでない	0.141	-0.165	0.741
19. バランスの良い-バランスの悪い	0.347	0.147	0.716
因子寄与	8.757	5.404	4.491
因子寄与率(%)	35.028	21.616	17.963
累積寄与率(%)	35.028	56.645	74.608

注 因子抽出法: 主因子法 回転法: Kaiser の正規化を伴うバリマックス法

注 3回の反復で回転が収束

2. 学生把握のための尺度

因子分析の結果から、学生自身の全体像を把握するための着眼点となる3つの尺度を抽出した。各尺度は、各因子に0.6以上の因子負荷量を持つ項目で構成されている。（表1参照）なお、3尺度の内の一貫性をCronbachの α 係数で求めたところ、「エネルギー感」尺度 $\alpha = .957$ 、「成熟度」尺度 $\alpha = .930$ 、「コントロール感」尺度 $\alpha = .882$ であった。

3. 各尺度得点の学生に見られる変化

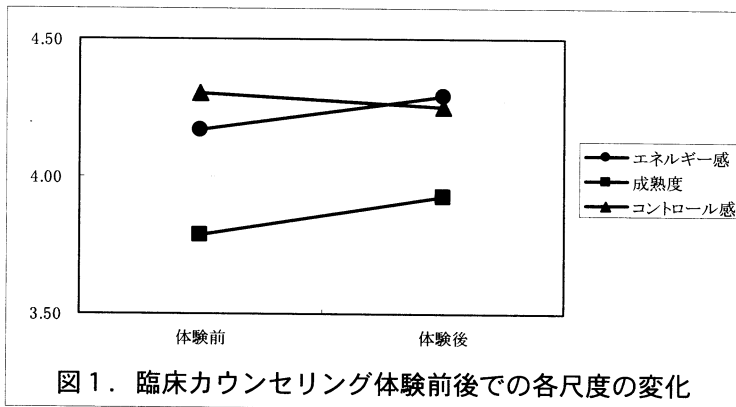
C系・G系体験前・体験後の各尺度得点について、対応のある場合の母平均値の差の検定を行った結果、表2・図1のような結果が得られた。C系・G系体験後は「成熟度」が有意に高くなっており、この時期を異なる2つのバウムを行ったあいだに、「成熟度」が有意に高まる傾向が見られた。（ $t(154) = .033, p < .05$ ）しかし、「エネルギー感」に関しては、有意差は見られないものの高まる傾向が見られる。

表2. 体験前後の平均値と対応のある場合の母平均値の差の検定
(N=155)

尺度	体験前	体験後	t 優位性
エネルギー感	4.169 (0.796)	4.293 (0.747)	<i>n.s.</i>
成熟度	3.788 (0.902)	3.925 (0.751)	*0.033
コントロール感	4.304 (0.727)	4.252 (0.783)	<i>n.s.</i>

注. 括弧内は標準偏差

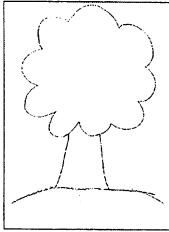
注. * $P < .05$



4. 「成熟度」が高くなったバウムテスト

今回、「成熟度」尺度において有意に高くなる傾向が見られたが、どのような形で表現されるのかを具体的に以下に示す。

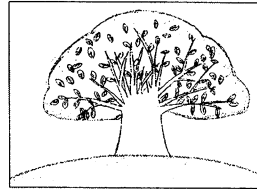
例1-体験前



はじめは、枝とかを書いていけど、なんかイメージと違うな・・・と思って消してしまった。

リンゴとか葉っぱとかいろいろ思い浮かんだけど、どう描いていいか分からなかった。

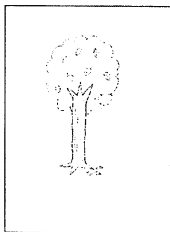
例1-体験後



もっと青々しくて、おい茂っているように描きたかった。

木の幹より上の部分(葉とか枝の部分)を線で描いて区切るのが難しかった。

例2-体験前

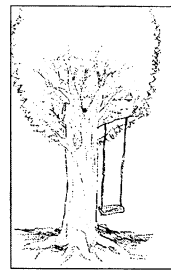


根っこが描きにくかった。不安定そうになった。

幹の太さも迷った。

落ちている最中の葉っぱを描こうか迷った。

例2-体験後



枝がどこまで伸びているか、葉っぱがどれほど茂っているか、よく分からなくて描きにくかった。根っこも同様。

このように、何らかの描きにくさや不完全さを感じながらも、表現されるバウムには、明らかな変化が見られている。例1では、始めは空白だった樹幹の内部に、体験後のバウムでは枝や葉が詳細に表現されており、視点が一步深まった印象がある。また、例2においては、前後を比較して、描かれる線の数が増えており、繊細さが表現されているバウムに変化している。

IV. 全体的考察

1. C系・G系体験の効果についての検討

本研究におけるC系・G系体験前後のバウムテストに関して、先行研究に見られるバウムテストの全体的印象評定の尺度に沿う形での結果が得られた。これは、学生の学部2回生後期開始時から3回生前期終了時における縦断的变化を捉える方法として有効であることが確かめられたといえるだろう。

学生に見られる全体的印象変化としては、エネルギーが高まる傾向があり、成熟度が有意に増すものの、若干コントロール感が低くなる傾向がみられる。このことから、この時期学生意識が、焦点化され、物事にぐっと深く関わる態度が形成されつつあり、それに向かうエネルギーも高まる時期であると考えられる。コントロール感が若干低くなっていることは、今変化の時を迎えつつあり、そのために元来の安定し固まった自分の殻を破り、新たな自分を模索するようなscrap and buildの過程にいるのかもしれない。

2. バウムテストから得られた3尺度についての検討

本研究では、先行研究と重なる3尺度が得られた。今回得られた各尺度について、学校教育場面でのどのような教師力となって学生が持つ資源となっていくのかを改めて考察していきたい。

ここで、断っておきたいのだが、そもそもバウムテストは、その人が意識的に表現するものではなく、無意識的における内面の表現であるので、第一印象として見た目で感じるものとは異なっていることも多々ある。大変落ち込んだ表情の人が、生き生きとしたバウムを描くこともあるし、逆に見た目には明るくて元気の良い印象をもつ人でも、バウムを描くと細く単純なバウムになることもある。自分がどう見られるかはある程度意識して作っていくことが出来るが、ここで見ているエネルギー感・成熟度・コントロール感とは、見た目の印象とは異なるものであることを明確にしておきたい。例えば、エネルギーが高いということは、大きな声で明るい表情で子どもと対応するという事に限らない。静かに冷静な態度でありながらも、しっかりと子どもを見ていくエネルギーが内面に満ちていることもある。このようなバウムテストの持つ特性を考慮した上で捉えていきたい。

(1) エネルギー感

エネルギーが高いバウムとは、どのような印象に基づいているのだろうか。少し長くなるが、具体的な形容詞を並べて、イメージを共有し、再確認しておきたいと思う。エネルギーが高いバウムとは、しっかりしていて、堂々とした、力強い、勢いのある、のびのびした、生き生きとした、豊かな、にぎやかな、大きい、充実した、安定した、開放的な、明るいバウムである。バウムは自己像の表現されたものなので、画用紙に広がるエネルギーを感じることは、その学生個人が持つエネルギーを反映している。子どもたちに向き合う際、子どもたちが受け取る教師イメージのひとつであるといえるだろう。エネルギー感で表現される印象は、どこかその人個人のもつ余裕、人間的な大きさなど頼りがいの有無を判断する一つの材料でもあり、安心感を与えることが出来る指標であるといえるかもしれない。

(2) 成熟度

成熟度が高いバウムとは、幼稚でない、写実的な、立体的な、複雑な、現実的な、成熟した、細かいバウムである。その表現の中に、繊細さ、緻密さを読み取る観察力を感じる事が出来る。子どもを理解する、保護者を理解するという行為には、やはりぐっと踏み込んで、「…かもしれない」「…はどうなんだろう？」と、今分かっている情報に留まらず、こちらから主体的に入り込んでいく質問や気づきから始めていくことしかできない。その際には、微細な変化や気になる何かをこちらが把握していこうという態度を持たなければ、「理解する」ということは深まってはいかないのである。具体的には、「いつもと違う何らかの変化に早めに気づくことが出来る」「一つの言葉を様々な可能性をもって捉えることが出来る」等、幅広く柔軟な対応の中から、その子どもの求めるものをしっかりと掴んでいく作業の基礎となる視点、態度であるといえるだろう。

(3) コントロール感

コントロール感が高いバウムとは、整った、まとまりのある、穏やかで、なめらかな、バランスの良いバウムである。安定感とも言い換えることができるかもしれない。自分自身をコントロールが出来ているということは、冷静に物事を判断していく際に支えとなる力であるとい

えるだろう。授業にしても、子ども理解にしても、仮説を立て、行動し、その後振り返って、今後に活かすという学習スタイルの循環は欠かせない思考パターンである。自己理解の積み重ねも同じような試行錯誤を繰り返す中で、自分のスタイルを作っていくことが可能になる。その際に、バランスを保ちながら子どもに対応していくことは、教師という枠組みの中で育ていく子どもたちの明確な基準となることができるだろう。もちろん、訂正、修正しながら進む基準であるが、戸惑いや不安が前面に出てくるのではなく、安定したやりとりをしながら関係を築いていくことが可能になるのではないだろうか。

3. 今後の課題

本研究では、1年間にわたる学生の変化に関してバウムテストを用いた考察を行ってきた。今回の分析で、バウムテスト尺度自体の有用性が確認されたものの、この変化は、研究対象期間において学生は様々な経験をしており、狭義にC系・G系体験の効果の検討とはいうことはできない。C系・G系体験をしていない学生との比較を分析すれば可能になるが、そのような研究は実際には難しい。ゆえに、今後はこの尺度と他のデータを組み合わせることによって、カリキュラムの再検討等、実質的な判断材料になるような方向で検討を行っていきたい。

V. おわりに

筆者は、スクールカウンセラーとして山陰両県の学校に勤務しているが、ほんの少しの配慮で、教師と子どもの行き違いが解消してしまうことが少なくない。スクールカウンセラーと一緒に考えていくケースとして取り上げることになり、子どもの様子を先生方と共に確認していく作業を積み重ねる中で、だんだんと静かに子どもが安定していくこともある。特別な配慮にも様々な強弱や方向があり一概にはいえないが、その子どもを“気にかける”という何気ないこころの動きが果たす大きな役割をいつもひしひしと感じている。

C系・G系の体験を通して育てようとしている「臨床マインド」とは、そんな“気にかける”こころの持ち様を体験的に学んでいこうとしている。そこには、もちろん知識や技能を知的に吸収していくことがベースになるが、体験からではないと学べないものに、「自分のこととして考える」という態度がある。「相手の立場に立って考える」ことは、「自分のこととして考える」ことと対でもあるが、同じことであるともいえる。「自分のこととして考える」ことを通して、子ども理解へ、保護者理解へ、学級理解へとつながっていくことを期待したい。

参考・引用文献

- 1) Koch, C. (著) 林勝造・国吉政一・一谷彊 (訳) (1970)「バウムテストー樹木画による人格診断法一」, 日本文化科学社.
- 2) 高橋知音 (1993)「キャンプ療法による登校拒否児の樹木画の変化ーバウムテストの全体的印象による評価一」, カウンセリング研究, 26, 19-28.
- 3) 鈴木慶子・鍋田恭孝 (1999)「バウムテストの全体的印象評定尺度の構成ーS-D法による因子的検討」, 大正大学臨床心理学専攻紀要, II, 82-29.
- 4) 鈴木慶子・鍋田恭孝・塩崎尚美 (2002)「バウムテストからみた構成的エンカウンター・グループの効果一

グループワーク前後のバウムテストの分析を通して」, 心理臨床学研究, Vol. 20, No. 4, p384-393.